

## 前尾衆議院議長と公明党(1)

平野 貞夫  
元参議院議員

1972 (昭和47) 年7月7日に成立した田中角栄政権は、日中国交回復で歴史的な評価を受け、日本列島改造論で国民に期待と不安を投げた。また、同年の総選挙で共産党の躍進におののき、衆院に小選挙区制を導入すべく国会運営を強行混乱させた。国民は議会不信を募らせ、国会改革を実現する議長を願望した。

1973 (昭和48) 年5月29日に、衆院議長の交代で、前尾繁三郎が就任し国会改革を国民に公約したが、2カ月後の7月末には、国民生活を守るため超長期の会期延長を強行議決し辞職の腹を固めたが、国民は留めた。

### 議会制度調査会による国会運営の改革

会期延長強行に抵抗して国会審議も拒否した野党

た国会運営を改革しようとの意図があった。沖繩復帰が実現するまでの臨時措置として「沖繩の国政参加措置法」を立案した。この調査会は、議長・副議長・議運委員長、各会派の議運理事とオプザーバーが、党や会派の立場を超えて個人の立場で議論することで話題となった。私は長期間、この調査会の事務担当を務めていた。

前尾議長は当時の国会不正常の原因を、①公明党と共産党が進出し、野党の多党化で「自社55年体制」が崩壊したこと、②情報や交通機関の発達で経済や生活の国際化や多様化などで、国会の制度や慣例が時代遅れになったこと、③各国では二院制や政党のあり方、議会のあり方がどんどん改善されているのに、日本では著しく遅れていること、などと考えていた。

この発想を知野事務総長の元で、「制度上改革すべきこと」と「運営上改革すべきこと」としてリストを作成した。これを私が公明党の大久保直彦議運理事に説明したところ、高く評価してくれた。共産党には知野事務総長が東中光雄議運理事に説明し了承を得た。自民・社会・民社各党には、前尾議長が説明した。

9月27日、280日に及んだ第71回特別国会の最終

は、8月10日の前尾議長の呼び掛けによる与野党国対委員長会議に応じた。前尾議長は「①再延長の期間には、参院の法案処理を中心とする。②社会も経済等も大きく変化した。国会の制度や運営を検証すべきだ。かつて設置した『議会制度調査会』を再開させ、国際化時代に対応できる改革を協議したい」と提案して各党が同意し国会は正常化した。

「議会制度調査会」とは、1966 (昭和41) 年1月4日、前年の日韓国会の大混乱を反省し、山口喜久一郎衆院議長と園田直副議長が伊勢神宮を参拝したとき記者会見で発表した構想である。園田副議長の秘書時代の私が、副議長担当の知野虎雄事務次長の指導で関わった思い出がある。

この時は戦後の新憲法下、占領軍の指導が残ってい

日、議運理事会で「議会制度調査会」の再出発が決まった。思えばこの調査会の発足と構想は、1966 (昭和41) 年1月に、当時の知野事務次長と副議長秘書の私の発想だった。知野事務次長は翌年に事務総長に就任し、衆院に進出した公明党に対応することになる。自民党の「健保持例法案」の憲法違反強行採決を、竹入義勝公明委員長と共に阻止したことは、本連載 (20年1月号) で記したとおりである。

知野事務総長は混乱する政治の都合で、6年間も事務総長を続けていた。総理クラスの園田議長が出現したとき、秘書を誰にするか事務局内で議論があった。人事担当会議が課長クラスの起用を上申ししたが、知野事務総長が拒否。5年も早く私を指名してきた。私は「人事の秩序が乱れる」と断った。

ところが直接呼び出しを受け、「君の最大の仕事は、私をトラブルなく辞めさせることだ。頼むから議長秘書を受けてくれ」と、懇請された経緯がある。園田副議長秘書時代の公明党の竹入委員長らとの関係が印象にあったからだと思う。会期最終日、知野事務総長は要望どおり無事に辞職できた。

### 前尾議長構想のともない脱線

「議会制度調査会」の最初の重要な狙いは、国際化した時代に諸外国でどんな議会改革や政策展開が行われているか、その実態を調査することであった。そのため、衆院議員の海外調査費を大幅に増額し、議長班は各党国対委員長が同行し、副議長班は国対副委員長が同行。議運班は委員長と理事が毎年、他の委員会は2年に1回の海外調査を行うこととなる。

この海外調査は発足して15年ぐらいは、新しい諸外国の制度や事態を直接に調査して、国会の制度や運営の改革に大いに役立った。特に各委員会は財政運営、環境問題、社会保障政策の日本への導入に学ぶところがあった。しかし1980年代の後半から、諸外国からの情報が正確に国内でも分かるようになる。

国会の海外調査が必要な時に行くことより、慣例で行くというか情性化するようになる。通常国会が終わった夏の慰安観光旅行のようになった。特にひどいのは議長班・副議長班・議運班で、国内でできなくなつた国会対策を外国で行うことになる。当然、国民から強い批判を受けることとなった。

松本善明（共） 国対委員長は直前に病氣入院して参加しなかった。

訪問国は公式訪問のイギリス・フランスの他、デンマーク・スウェーデン・スペインであった。10月13日に帰国し、各国で二院制が一院制に移行しており、二院制を維持する国でも「二院制の一院的運営」で効率化が実現。社会や経済の変化が早い国際化の中で、与野党が日本の国会改革に共通の認識を持った。

訪問したスペインは、当時、フランコ総統による独裁国で、議会政治国とは言えなかった。この国の首都マドリッドを訪問したのは、海外旅行の息抜きと言えた。それでも前尾議長の名が国際的に知られていて、超VIPとして扱われて困惑した。ここで私の人生観が変わる体験をした思い出を語りたい。

マドリッドに着いた翌朝、議員団全員で朝食をとった。同行の秘書課長による日程の報告が終わると、社会党の楯国対委員長が「前尾議長。今夜は平野君を自由にしてやって欲しい。いっばいお金を持たせて」と発言した。前尾議長はニコニコ顔で「わかったよ」と答える。私は何のことか唖然とする。私は国対委員長の中で、もっとも親しい公明党の伏木委員長を朝食後

日本の国会がいかに活動の背後で、不合理で非倫理的なことが行われていたか。この海外調査の実態を説明すれば分かる。この制度は「議会制度調査会」で「前尾議長構想」として了承されたものだが、アイデアは知野事務総長と私が出したものである。平成時代に入り何度か改革されており、かつてほどの墮落したことはないと思うが、古いことを知る人たちは、二人が他界しているので私への批判が残っている。

海外調査には事務局から職員が同行する。私は議長班と議運班で、1973（昭和48）年から91（平成3）年にかけて、15回くらい同行している。その中で最初の第1回の議長班の同行が、どんな実態だったか。正直に説明しておきたい。その中で公明党の国会議員の行動に注目してもらいたい。

### スペイン・マドリッドでの買春物語

1973（昭和48）年9月29日、前尾議長を団長とする第1回議長各党国対委員長による各国議会制度及び政治経済事情調査団は、羽田空港を出発した。参加したのは原田憲（自）、楯兼次郎（社）、伏木和雄（公明）、池田禎一（民）の各国対委員長で、参加予定の

訪ね、楯委員長の真意を聞いた。

伏木国対委員長は「日本では共産党が多数になるまで、自民党と会談を料亭でやるとき芸者と遊ぶ。その後のことはわかるだろう」と。なるほど「これまで国内でやっていた買春を外国でやり、それが裏の国会対策か」と気がついた。すぐ日本大使館の担当者呼び、マドリッドの買春の状況を聞き夜の準備をした。

その日は夕食会の後、フラメンコを観てから深夜零時頃にホテルに帰った。前尾議長と池田国対委員長は70歳近いから就寝してもらった。原田・楯・伏木と私で、予約したクラブに行く。女性たちが待っていた。私が女性たちにドル札を渡し、相手を決め近くのペントハウスに行く。それを見届け、午前2時頃に私が参加。

三人の国対委員長が用を済ませた後、タクシーでホテルに帰り、私がペントハウスを出たのが午前4時ごろ。タクシーもなく歩いてホテルに向かっていると、午後10時から戒厳令となっていて、兵隊二人が銃を肩に私を尾行してくる。私はスペインで人生を終わるのか、との思いと共に、日本の議会政治に絶望した。